

熱い市議選が終わった。期日前投票に行った友人の話を聞いて爆笑した。選管に「何人まで書ける？」と本気で聞いている人がいたという。

選挙前、「あちこちからお願ひされていて誰に入れたらいいのかわからない」と言う声も聞いた。

親せき縁者、友人、特に近い存在がいるならば、必然的に決定できるかもしれない。

## 曜随筆

しかし、人間関係が交差する石垣島では、その縁者が多岐にわたることも少なくないようだ。

そして、「誰に入れても一緒」誰がなっても変わらな「い」といった声もよく聞く。これらの声は、自分の声でもあると受け取った。それほど、自分と政治が遠いのだ。私は、友人たちと政治につい

て話し合った。

今の自分の暮らしにどう政治が生かされているのか実感がない。この国がどのように運営されているのか無知である。今、身の回りに起こっていることが政治とどう結びついているのかわからない。そこに関心がない。選挙の際は、いつもこの当たりの人だろうと、よく知りもしないで一票を投じる。

見識の高い友人の一人に「投票率5割以下で、国の政治が決まっていくのはおかしいと思わないか？」と投げかけられ、他の私たちは、はっとした。あまりに無知過ぎること、あまりに無関心なこと、政治がいつのまにか人ごとになってしまっている現状があった。これを平和ボケと言うらしい。

日常、大方、何ごともなく過ごせる。自分の国がどうやって運営されているのかわからなくても暮らしている。そして、行政とは法の下の仕事であることすら、意識できてない。私たちは、政治は政治家に丸投げ状態であることを

市原由加里

## 意識改革

あらためて自覚した。そんな私たちは、何かあれば、政治や行政のせいだけにしていないうか？ 私たちが選んでいる政治家がこの国の法律を決めていることを忘れて。しかしながら、この社会の仕組みにさえ無頓着な私たちは、身の回りで起こることに対して、不便さや矛盾を感じるとき、何をどうしたらいいのか、どこに働きかけたらいいのかわからないことも多い。



身近な問題の中から、見識ある友人の社会のしくみの解説に惹きつけられ、どう動けばいいかが整理がつく。政治がぐっと自分に近づいてくるのを感じた。そうして、私たちの意識改革がまずありきではないかと思えた。

15年ほど前に手にしたアド

ラー心理学関連の本を思い出す。「民主主義の社会になって戦後50年。しかし、いまだに私たちは民主的な暮らし方を知らない」の一説に衝撃を受けた。

第一次世界大戦時代のオーストリアの精神科医A・アドラーは、社会を変革するのは、政治的な革命ではなく、個人個人の成長しかないと、独自の心理学が形創られていった。

いつの時代も、社会は不完全なまま進む。私たちが、この社会を創っているのだという自覚なしで、変革はないと思う。まずは、身近な問題で不便さや矛盾を感じたら、今の制度の中で、できることは何か、できないことは何かを知る。そして、政治に関心を向けること、改革に向けて自分ができることを探していくこと。それは、政治に委ねることなく、市民レベルでできることかもしれない。そんなことから始まると思えた選挙の裏側であった。

(グッドシエア代表)